

# 平安時代の文学に見え近江国

## I 大津市

詩人、小野十三郎は戦前から「短歌的叙情」を排し批評精神を重視しようという運動を推進しつづけてきました。どうしてこういう運動をしつづけてきたのかという理由は、日本の文学「詩・小説」の世界にまで千年の伝統をもつ、和歌の詠嘆、余韻を尊しとする韻律がまつわりついていたからです。

和歌の歴史は、神代の昔にさかのぼります。素盞鳴尊すさのなるみことの「八雲たつ出雲八重垣……」に始まり、奈良時代には、今日なお愛唱される幾多の作品を含む万葉集が完成しました。ただその表記は、音訓を用いた漢字ばかりのもので、目で読むよりも耳で聞く鑑賞方法が主流となったかと思われます。

ところが、平安時代に入りますと唐王朝の力の衰えから、遣唐使けんとうしを派遣しても取るべきものがないというところから、これを廃止しようとする菅原道真の献議が入れられ、国風文化が興隆することになりました。そこで漢文の世界から、和文の世界が展開し、仮名文字が文学の発展に大きな力を示すようになりました。勅撰の漢詩集は三集でおわり、平安

時代には、古今・後撰・拾遺・後拾遺・金葉・詞花・千載と七つの勅撰和歌集が誕生しました。

この時代の文学は主として宮廷や貴族に仕える女房たちがそのにない手となりましたので「女房文学」とも称せられています。「枕草子」・「源氏物語」はその代表的な作品です。そして和歌は当時の貴族にとっては必須の教養科目となっていたのです。「源氏物語」ですら和歌と地の文がうまく調和しているという見方がされなくてはいけなかった時代であり、和歌はあくまでも文学の主流であるとされていました。

今回はそうした意味から、主として勅撰集にえらび出された和歌を中心に、それが詠まれた、近江国の地名を解説してみたいと思います。

### 逢坂

- これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関 後撰集・雑 蟬 丸
- 夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさじ 後拾遺集・雑 清少納言



安念塔からの眺望

・名にしおはば逢坂山のさねかづら人にしられ  
 てくるよしもがな 後撰集・恋 藤原定方  
 歌がるたとして人々に愛唱されている「百人一首」で、近江の国にかかわる作品は不思議に逢坂山を主題にした作品が多く見られます。「源氏物語」関屋の巻では常陸から上って来た空蟬の君が、石山寺へ参詣する源氏の君とめぐりあう話もここで展開されるのです。三条右大臣定方の歌に「名にし負はば逢坂山の」と歌い出されているように、恋人とデートするという意味の「逢」という名をもった地名とともに、畿内と畿外とをわかっところの大切な地名でもあり、都の人々にとってもまことに重大な意味をもっていたのでしょうか。蟬丸の歌にはそうしたひびきが強く感じられます。後世坂神として、蟬丸神社に祀られたのも、こうした作品がなかだちとなっているのではないかと思います。

#### 逢坂山の駒迎え

・逢坂の関の清水に影見えて今か引くらむ望月  
 の駒 拾遺集 紀 貫之  
 この歌は「延喜の御時、月次の御屏風に」という詞書を伴っています。帝の御傍近くにめぐらせる屏風絵につけられた作品で人口に膾炙した歌であったのでしょうか。律令制度は平安時代に入って次第に崩れて行きます。が、醍醐天皇の頃は延喜の治と称せられ、その制度を維持しようといろいろ工夫された時代です。

甲斐や信濃の牧場で飼育されていた馬を都まで引いてくる行事があり、左右馬寮の官人



が逢坂の関まで出迎えました。この一首は8月15日仲秋の名月の日に、逢坂山の関の清水に、美しく写っている月と、信濃望月から引かれて来た駒とがうつりあうドラマチックな作品です。鴨長明の頃、すでに関清水の所在が不明になっていたと「無明抄」に記されています。下の蟬丸神社には、湧井のあとを石で組んでいます。それも大正末年、逢坂山トンネルを掘削してから水がかれてしまいました。そこには「逢坂山のさねかづら」が植えられていますので、志のある方は是非見ておいてほしいものです。

#### 関寺 牛塔

・ききしより牛に心をかけながらまだこそ越えね逢坂の関 栄華物語 和泉式部  
 万寿二年(1025)藤原氏の栄華が最盛期を迎えていたころ、関寺造営のことがあり、その工事を助けようと、迦葉仏が黒い牛となってあらわれたとの噂がひろまり、大相国藤原道長以下が参詣したことを「栄華物語」「みねの月」の巻は記しています。和泉式部の一首は詣でたい気持をもちながら詣でられない気持を趣ふかくうたいあげています。今は重要文化財に指定されている宝塔だけが平安時代の面影をわずかに伝えているだけです。

#### 長等山

・さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな 千載集 読人しらず  
 「源平の争乱が治まって撰集の沙汰のある時は、たとえ一首なりとも入れていただきたい」と歌の師俊成に一卷の巻物を預けて死所へおもむいた平忠度の都落ちは、平家物語の中のエレジーでもあります。

天智天皇の大津京のあとの荒廃を「昔ながらの」長等山の山桜がうつくしく飾っています。読人しらずとされたこの一首に亡びゆく平家一門の悲しい運命をかさねてみると更に深い嘆きを感じとれるのではないのでしょうか。

西国三十三所の札所で御朱印を頂くと水くきのあともうるわしく、長等山三井寺と記さ

れる長等山は今もなお三井寺の歴史とともにあるのでしょうか。

### 打出の浜

「枕草子」に「浜は、そとの浜、吹上の浜、長浜、打出の浜」と記されています。都の人に最も近く、印象的な浜であったと思われます。「大和物語」にも亭子院をこの浜におむかえして

・さざら波間もなく岸は洗ふめりなぎさきよ  
くば君とまれとか 大友黒主

と詠み、滋賀郡の郡領大友黒主はこの浜に仮屋を建て、当時大陸渡来の珍しい花であった菊を植え、御感にあずかったといひます。

「かげろふ日記」中の巻にここから舟ののって石山へ向かった記事や石山からこの浜へ舟で戻って来た記事があります。平安時代から渡舟の設備があったことがうかがえます。

### 粟津

今年木曾義仲、今井兼平主従が粟津原の露と消えた寿永三年(1184)から数えてちょうど800年目にあたります。粟津という地名は、琵琶湖が瀬田川となるあたりから木曾義仲、芭蕉の塚のある義仲寺あたりまでの広い範囲を示すものであったようです。

又ここは、壬申の乱における組織的な戦闘の最後となった所でもあり、吉野軍の村国連男依が近江軍の将、犬養連五十君及び谷直塩手を切った所です。



・あは津野のすぐろの薄つつのぐめば冬立ちな  
づむ駒ぞいばゆる 後拾遺集 権僧正静円  
この一首にも、野焼きののちの薄つから新しい芽が角組つんできて、春駒が声たからかになく様のうしろに、遠い壬申乱のおもかげを感じとった歌人のころがうかがえるのではないのでしょうか。

### 瀬田の橋

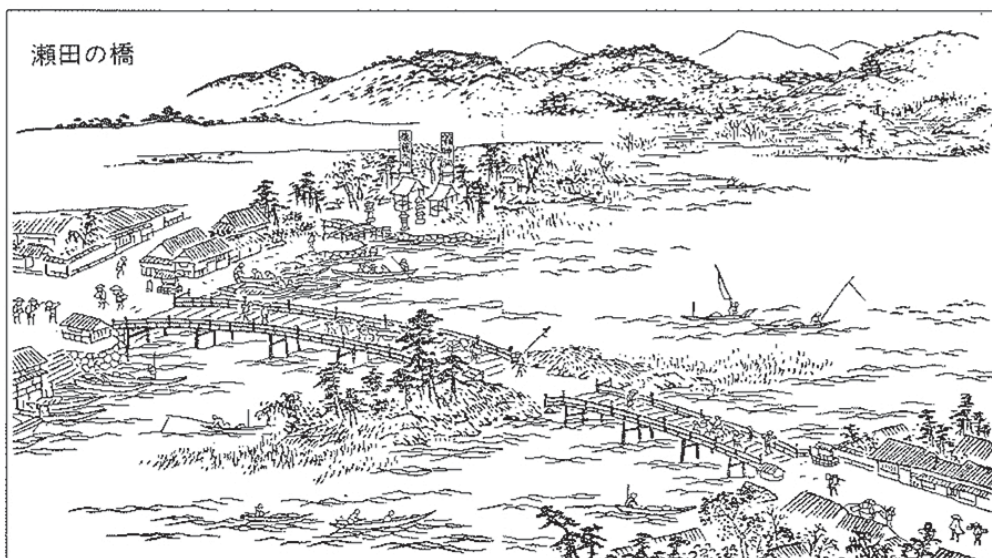
天禄元年(970)大嘗会悠紀方屏風の歌  
近江国勢多橋をよめる

・みつぎ物たえずそなふるあづまぢのせたの  
ながはしおともとどろに

風雅集 平 兼盛

瀬田の橋は、日本書紀天武天皇即位前紀に壬申の乱の記事があり、近江軍の将、智尊が橋を三丈ばかり切断して戦ったことが記されています。この橋を東へ渡ったところに近江国府の庁舎があり、政治の中樞をなしていま

ました。交通の要衝でもあり、この一首にも見られるように貢納された品には、いったん国府へ入り、それから都へと向かったのでありましよう。それを運送する人馬のとどろきが、瀬田の長橋をゆるがせた遠い日のことがしのべれます。



## 石山寺

東大寺大仏の鍍金を祈り出した良弁僧正の開基の寺で、今は真言宗となっています。正倉院に伝わる文書によると、石山院という名称のもとに、田上山、信楽の良材をいったんここに集めて瀬田川を下していったことが記されています。平安時代には、長谷寺と並んで都の人々が観音信仰のメッカとして参詣にきたところでした。また、源氏物語の作者、紫式部がこの寺にこもって、須磨の十五夜のくだりから源氏物語を書き始めたという伝えも残されています。

石山にこもりて侍りける時よめる

- 谷川の流は雨ときこゆれど外よりはるるあり明の月  
新拾遺 菅原孝標朝臣女

更級日記の著者が石山に詣でたのは「更級日記」によると、寛徳二年(1045)霜月廿余日のことで、雪がはげしく降ったことが記されています。有明の月が詠われているのはうまくあうのですが、谷川の流が雨の降るように聞えるというのは、季節的にはあわないようにも思えます。

## 田上

たなかみにてよみ侍りける

- たびねするあしのまろやのさむければつまぎこりつむ舟いそぐなり

新古今集 大納言経信

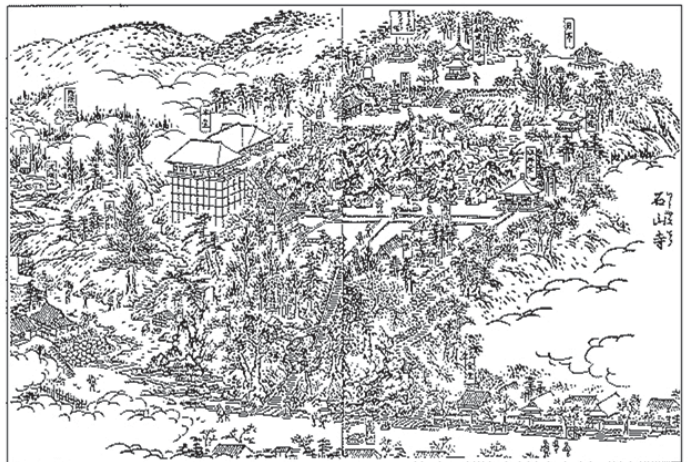
源経信(1016~1097)は博学・多能の士で公任と並び称せられました。別業を田上に作りここの作品が数多く残されています。燃料としての薪をこのあたりから積み出し、逢坂山を越え京へ持って行ったのでしょう。寒さにむかう山里の生活風景がいきいきと写し出されているではありませんか。

内裏御屏風に

- 月影のたなかみ河にきよければ網代にひをのよるも見えけり  
清原元輔

瀬田川・宇治川の網代木は、人麿の作品にも詠われてから、癖化して、海へくだる鮎の稚魚「氷魚」をとる設備のあったところとし

て有名でした。大戸川と瀬田川と合流するあたり黒津の供御瀬あたりは、源平の合戦の際、範頼軍が徒渉した古戦場でもあり、網代をたてるには都合のよい浅瀬があったのでしょう。この一首は月光によって氷魚の魚影が見えるという美しい風景を精密にうたいあげています。



## 唐崎

「かげろふ日記」中巻に「いとほどせばき崎にてしものかたは、水きはに車たてたり」とあり「風はいみじうふけども木蔭なければ、いとあつし」とありますから、今日の如く、護岸のための石垣や唐崎の松などはなかったのでしょうか。ここは「みそぎはらへ」の場所としては七瀬の碓の一つとして有名でした。

堀河院御時百首歌たてまつり侍りけるに、はるたつところをよめる

- こほりるししかのからさきうちとけてさぎなみよする春かぜぞふく

詞花集 大蔵卿匡房

この一首は勅撰集の第六番目詞花集の巻頭歌です。巻頭に据えられる歌だけあって、大きく明るく、春を迎えるにはまことにかっこうの作品だといえましょう。

## 志賀の山越え

はるたちける日よめる

- 袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

古今集 紀貫之

しがの山ごえに女のおほくあへりける

によみてつかはしける

- あづさゆみはるの山辺をこえくれば道もさりあへず花ぞちりける

古今集 紀 貫之

しがの山ごえにてよめる

- 山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

古今集 春道列樹

しがの山ごえにていしるのもとにてもの

いひける人のわかれけるをりによめる

- むすぶてのしづくににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな

古今集 紀 貫之

天智天皇が創建された崇福寺は、平城京に遷都された桓武天皇にとっては曾祖父のおたてになった寺でもあり、志賀山寺への参詣がしきりに行なわれました。そうした時にたどったのが志賀の山越えでした。古今集には、数多くの作品が残されており作品の質としても立派なものが多いようです。やはり、こころの緊張度が土地がらのゆえで強くなっていることが指摘できるのではないのでしょうか。

### 比叡山

比叡山中堂建立時

- 阿耨多羅三藐三菩提のほとけたち我が立つ  
杣に冥加有らせ給へ

新古今集 伝教大師

奈良時代の編とされている「懷風藻」に、藤原連陽春の作品が一首採録されています。それは「藤江守禪叡山の先考が禪処の柳樹を詠むの作に和す」という題詞をともなっています。比叡山は既に奈良時代からひらけていたのでしょうか。伝教大師は延暦四年(785)東大寺で具足戒を受けてから間もなく12年間の籠山生活を致します。そうした時の作品がこの一首でありましょう。求道のはげしい気迫と祈りがうかがえるではありませんか。

貫之の詞 黒主の詞

世の中心ほそくおぼえてつねならぬ心  
地も侍りければ公忠朝臣のもとによみて

つかはしける、このあひだやまひおもくなりけり

- 手に結ぶ水にやどれる月影のあるかなきかの世にこそありけれ

拾遺集 紀 貫之

古今集の選者である貫之を祀り、旧正光寺村(現在南志賀1丁目)にあり、黒主の祠と



隣りあっています。近江名所図会には、「但し、此地に祭る事其由縁を知らず」とのべています。ただ墓が比叡山にあり、前にもふれた如く、志賀の山越えでの作品が古今集にも採録されているところから、ここに奉祀したのでありましょう。俗称「蟻なしの宮」というのはここにひいた一首の第四句を伝えているのでありましょう。

黒主の姓は古今集仮名序や、本文では「大伴」と記されているが真名序では「大友」と記されています。続日本紀・神護景雲元年に



稲1万束墾田10町を西大寺に施入した大友村主人主という人名などからいって「大友」が正しいのではないかと思われています。黒主は天台座主記によれば、滋賀郡大領であり、貞観年間には園城寺神祀別当をつとめました。又、六歌仙の一人としても有名ですが、例の百人一首には残念ながら採録されていません。これは、仮名序に「おほとものくろぬしはそのさまいやし。いはばたきぎおへる山びとの花のかげにやすめるが如し。

- 思ひいでてこひしき時ははつかりの鳴きてわたると人は知らずや
  - かがみ山いざ立ちよりて見てゆかむとしへぬる身はおいやしぬると」
- とあるところからきた偏見のいたすところであったかもしれません。

#### 真野

- うづら鳴く真野の入江の浜風にをばななみよる秋の夕ぐれ 源 俊頼
- 琵琶湖大橋の北側に真野川の作ったデルタがあり、水泳場の設備がよくととのった真野浜がひらけています。今この歌碑が立っている所は湖岸からは500メートルもへだたっていますが、江戸時代に新田開発事業がおこなわれ、陸地となったところで今も蒲の群生が見られます。平安時代に編まれた「姓氏録」には、小野氏と先祖を同じくする真野氏の根

拠地であった所で、滋賀県有数の前方後円墳天王山古墳をうしろに控えた所でもあります。この一首、美しい秋の夕暮の風景を聴覚視覚で構成して

いますね。

#### 志賀の浦

- さよふくるまにみぎはやこほるらんとほざかりゆくしがのうらなみ 快覚法師
- 気候は歴史的にみて寒冷期と温暖期をくりかえしています。平安時代は桜の開花期の記録などからみると、寒冷期にあたっており、楊子江河口にある太湖が氷結し車がその上を通過し得たという中国の記録もあります。だから、湖岸が氷結してゆくということも事実あったのかも知れません。夜がふけるにつれて、波が遠ざかってゆくおどろきがよく表現されているではありませんか。時代は下がりますが、新古今集の- しがのうらやとほざかりゆく浪間よりこほりて出づるあり明の月 藤原家隆

の一首の本歌として引きあいに出される一首です。「志賀の浦」は、堅田から南へ旧滋賀郡一帯の湖岸をさすものといわれます。

とにかく近江国は、京の都となりあう豊かな国で、湖水を控え、神社仏閣にとみ、詩歌や物語にとってもその素材を得るかっこうの国であったに違いありません。そうした意味あいを古典にさぐりあて、私たちがこの国に住む幸せを味わっていただきたいものです。

(山村金三郎氏提供)

